

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「日本語という箱」

兵庫県

武庫川女子大学附属中学校 3年

荒木 瑞生

日本語という箱

武庫川女子大学附属中学校 三年

荒木 瑞生

「言葉」を「箱」にたとえた時、明快な表現を好む英語では、その箱をふたの開いた状態でぼんと手渡されるようなものだと思います。その箱の中に詰まった思いや感情は、ふたが開いているのですぐに理解することができます。けれどこれが日本語の場合、この箱のふたは固く閉ざされた状態で渡されることが多いと感じます。箱の外面を上下左右、色々な方向から見たり、振ったり、様々な試行錯誤を繰り返して中に何が入っているのかを想像しなければならぬ、「想像の余地」が広すぎるほどに残された言語だということ。これが、私の思う日本語の大きな特徴です。

この「ふたの閉じた箱」は、私達の会話にも度々登場します。誰かと会話していて「何となく」と言ったことが無い、という人はいるでしょうか？ きつといないと思います。そして、この「何となく」という言葉を言われた人は、自分なりにその「何となく」がどういった気持ちなのか想像を巡らせるはず。「何となく」と書かれた箱の中身が何なのか。それは、渡した側の人間が詳しく説明するか、受け取った側の人間が想像するしかないのです。そのほか、「ある意味では」や「くと思われる」、「そう言われてみれば」など、日本語には自らの言葉を断定的なはつきりしたものにせず、相手に判断を任せざるあいまいな表現が山ほど存在し、私達もその表現を日常会話の中で当たり前のように使っています。はつきりとしたものを好む人に言わせれば、それは日本語の短所なのかもしれません。しかし、私はそうとは思えないのです。

単なる優柔不断さからくるあいまいさ。これは中身の入っていない箱です。振っても何にも音がしませんし、もちろん中身が入っていないので重みもありません。けれど優しさや気遣いからくるあいまいさという箱には、中身がたっぷり詰まっています。こうしたあいまいな表現は人間関係の場において非常にうまく私達の間を取り持ち、円滑な関係を築くことを助けます。こういった表現でよく例にあげられるのが京都の「ぶぶ漬け（お茶漬け）」の話ですが、これは京都で「ぶぶ漬けでもどないですか」と聞かれたら、それは暗に「そろそろお帰り頂きたいのですが」を示しているので丁重に断って帰った方がよい、というたとえ話です。実際には京都でそんな会話は交わされていないのだそうですが、このたとえ話は日本語のいい意味での「あいまいさ」を見事に表していると思います。

食事時まで長居する客人に対して「帰ってくれ」と素直に言ってしまうと、相手はきつといい気分ではないでしょう。しかし「今はお茶漬け程度のものしか用意ができないので、また今度、改めて来てください」という意味を込めて「ぶぶ漬けでも」と声を掛けることで、さり気なく相手に自分が食事時まで長居をしてしまったということに気付かせ、失礼なく帰宅を促そうという気遣いが表れています。

言葉という箱の中に隠された相手の気持ちをくみ取るうとすることは、相手と向き合い、理解しようと思う気持ちに繋がります。これによって、素直に気持ちを伝えるよりも強くその気持ちが相手に伝わることもあります。文学の世界に、「行間を読む」という言葉があるように、日本語には目に見えて表れない感情や思いを読み取り、よりよい人間関係を築いていくための表現と心意気が溢れています。

言葉でお互いがお互いを気遣い、思いやることのできる日本語は美しいとは思いませんか？ 「箱の中身」があいまいにぼかされていることに気付く鋭い洞察力と、ぼかされたものが何なのかをくみ取る想像力をもって、いかに相手に失礼のないようにするかを考えるとということ。これは、海に囲まれ、ほかの国の文化が入ってきづらいという環境で独自に発展してきた日本だけの文化です。

現代社会では日本語を正しく使うことのできない人が増えてきているそうです。そして私も、ふと使った日本語の言葉の用法や、その認識が間違っていない、と断言することはできません。しかしこれから先、歴史や情緒、人情に溢れたこの日本語という言語を学び、正しい使い方を心がけるということは誰にでもできるのではないのでしょうか。

将来、自分が美しい日本語を使える大人になっていること。それから、正しい日本語を使うことができ、子供達にそれを教えられる大人が増えていることを願います。